ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　あれから、一年と五ヶ月の月日が流れた。

　この日も相変わらず、雲一つ無い快晴だ。風が吹けば、蕾が揺れる。きっともうすぐ、蕾はきれいなピンク色の花を咲かせるだろう。どこの学校も、式典の準備で忙しそうだ。それは勿論、一之上市も例外ではない。街に行けば、随分と賑わっている。

　だが、そんなものとは無関係な、それでも元気な少年達の声が、ここ、田島道場から聞こえてきた。外のバトル場からだ。

「リーフィア、マジカルリーフ！」

「ピチュー、叩き落せ！」

　体の各所から葉っぱのようなものが生えた、クリーム色の体をしたポケモンから発せられた、無数の葉っぱを、小さな電気鼠のピチューが雷パンチで全て叩き落とす。そして、瞬時にリーフィアとの距離を詰める。

「もう一発！　雷パンチ！」

　そのままピチューはリーフィアを殴り飛ばした。リーフィアは吹っ飛び、地面に激突して気絶する。

「よし、いいぞ！」

　そう声を上げてピチューにピースするのは、あの時崖から落ちた少年、青柳雅也だ。彼は一体、どうやってあそこから生きて帰れたのだろうか。

　その謎は、すぐに分かる。

　雅也は、ピチューを一旦モンスターボールに戻して、代わりにリオルを出す。

「よくやった、リーフィア、戻れ。行け！　チコリータ！」

　それに対し、気絶したリーフィアを勞って、モンスターボールの中に戻す少年は、相川拓馬。一之上学校の初等部一年生……いや、今度は二年生になる子である。

　ちなみに雅也も、もうすぐ一之上学校に入学する。拓馬の、後輩となるのだ。

　そのすぐ近くで、二人の戦いを真剣な顔で見ているのは、田島良助。彼も拓馬と同じく初等部二年になる……と言いたいところだが、彼は学校には通っていない。国に認められた道場の正当な後継者は――条件はあるものの――学校に通わなくてもいい、という法律があるからだ。

　そんなこんなとしている内に、チコリータがリオルのはっけいを華麗に躱し、体当たりをぶちかまして気絶させた。

「よくやった、リオル。ピチュー、ゴー！」

　ボールから出るやいなや、ピチューがチコリータに飛びかかる。自身の拳を打ち込もうとするも、チコリータは頭の葉っぱで、それを受け止め、そのまま後ろに流す。体勢を崩したピチューは、前につんのめる。あっ、と、雅也が声を上げた。

　勿論、拓馬はこんな隙は見逃さない。そのまま前に倒れるピチューを指差す。ピチューは倒れながらも、せめて仰向けになろうと体を捻っていた。

「チコリータ、のしかかり！」

「受け止めろ！」

　また悪い癖が出てしまったと、心の中で溜息を吐くも、まだ諦めずに雅也は叫ぶ。

　のしかかろうと覆いかぶさってくるチコリータの前足を押さえ、必死にピチューは腕に力を込める。それでも体勢は、ピチューの方が不利だ。徐々に、ピチューの体にチコリータの腹が近づいていく。

「いっけぇー、チコリータ！」

　拓馬がそう叫ぶ。その瞬間、チコリータの体が光りだす。

「おっ、きたか」

　良助が感心したような目をして、そう呟いた。反対に、雅也は露骨に、ゲェーっというような顔をしていた。

　チコリータの輝きは止まらない。みるみるうちに体が大きくなり、体の形状も変わっていく。首の周りに、葉っぱをドリルの形に巻いたようなものが、幾つも出来上がる。

「よしっ、進化だ！」

　拓馬が拳をギュッと握り、そんな声を出す。光はやがて弾け、衝撃で砂が舞う。

　チコリータは、ベイリーフに進化した。

　それまで必死にチコリータの体重を支えていたピチューだったが、進化して重くなったベイリーフの重さには耐え切れなかったようで、あっという間に押しつぶされる。ベイリーフがどくと、ピチューは目を回していた。気絶している。

「勝者、相川拓馬！」

「あーぁ、負けちゃった。ピチュー、よく頑張った」

　ピチューに近づきながら、雅也はそう言う。

「しっかしスゲーな。バトル中に、しかも狙ってようなタイミングで進化するなんてさ」

　良助も、先程までの真面目そうな顔は何処へやら、ケラケラと笑いながら拓馬の背中をバンっと叩く。

「いっ……ま、まぁ、そろそろ進化するのは分かってたからね。どうにかして、バトル中に進化させたくて、タイミングを見計らってたんだ」

　叩かれた所をさすりながら、拓馬は言った。やれやれとした顔で、雅也は首を横に振る。

「全く……あんなタイミングで進化されちゃ、勝てるものも勝てないって」

「あれ、あそこから、どうやって勝つつもりだったんだい？　雅也クン？」

「そ……そりゃ、気合……かな？　って、そんなことより、良助。次、僕とやろう」

　ニヤニヤしている良助に顔を赤くしながらも、雅也は慌ててそう言う。

「……まっ、いいぜ。でも、少し休憩な。お前のポケモン、さっき戦ったばかりだろ？」

「まあね。じゃあ、十分休憩ね」

　雅也が頷いてそう言うと、拓馬はベイリーフの頭を撫でながら、口を開いた。

「審判は、僕がやるよ」

「おう、頼む」

「じゃあ、お願い」

　二人は、そう言った。